

日本財団助成事業

広域連携拠点整備事業レポート

2018年2月5日～2月10日

今回は東海沖で地震が発生して東京では医療的ケアの必要な重度障害者の地域生活を維持することが難しくなった、という設定で、北陸経由のルートで関西に広域避難する実地テストを行った。避難者役として、人工呼吸器ユーザーの当事者団体である呼ねっこの梶山紘平さん（筋ジス・呼吸器ユーザー）の協力を得て実施した。



2月5日

朝に発災し、東海道が使えないという想定で北陸を経由して西宮へ向かうルートで避難を開始したものの、大雪により金沢付近で運休となってしまったため、急遽、東京に引き返して東海道新幹線で西宮へ移動することに。

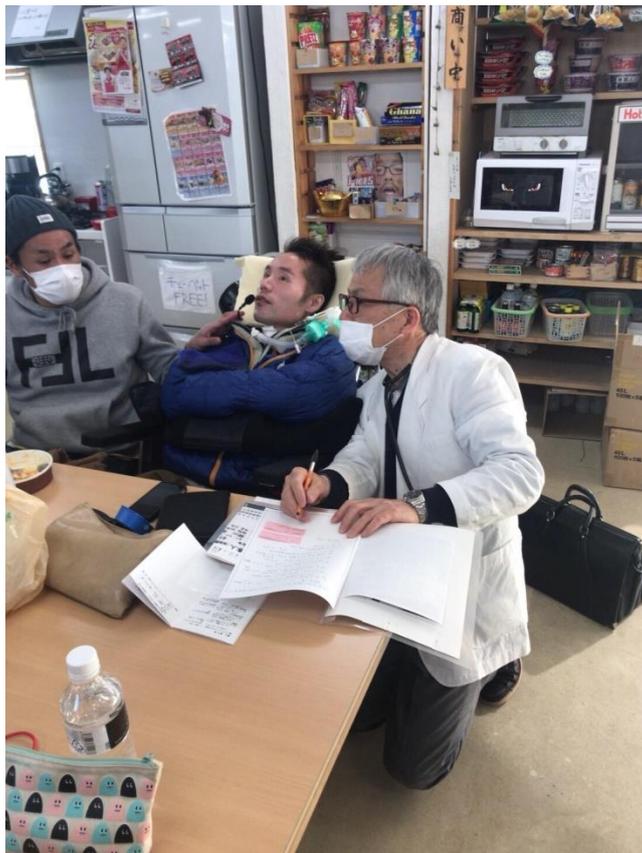
夜、梶山さんは到着できていなかったが、介助シフトを組むための会議を開催。各センターのコーディネーターに集まってもらい、いつ、どこのセンターから介助者を派遣するかという話し合いが行われた。なお、梶山さんは0時ごろメインストリーム協会に到着。



出席者：メイン青木、メイン楠、メイン藤田、リアライズ川口、あるる堂岡、ムーブメント西浦、DPI 鷺原

2月6日

メインストリーム協会が普段からお世話になっている岩田先生という医師にきてもらい、梶山さんの薬などの処方箋を用意してくれた。今回はテストということで事前にお薬手帳を岩田医師に見せていたが、いずれにしてもお薬手帳があると必要な薬が手元に届くまでの時間短縮を図れることがわかった。



この日は日中、一人介助で食事の時に誤嚥があり、梶山さんが東京から連れてきていたヘルパーも入って対応した。

実際に梶山さんの介助内容を確認すると介助の引継ぎに時間がかかることがわかったため、メインストリーム協会のコーディネーターが梶山さんお介助マニュアルを作成し、この日の夜の引継ぎから介助マニュアルを活用した。マニュアルは写真に加えて、動画も撮影して各センターから派遣されてくるヘルパーがそれを見て介助できるようにした。引継ぎはどうしても必要なものとそうでないものと取捨選択をしたり、引継ぎのために介助時間を1時間だけ重ねたりといった工夫をして、できる限り簡略化を図った。



2月7日

介助マニュアルを活用するようになって関西から派遣されるヘルパーだけでうまく介助を回せるようになってきた。この日は、着替えなど日用品の買い出しにでかけた。



医療的ケアに関する用品として探していた気管切開部にあてるガーゼや吸引用のカテーテルは入手できなかったため、メインストリーム協会の呼吸器ユーザーからもらって対応した。

2月8日

梶山さんは日常、訪問入浴のサービスを使っていて、ヘルパーによる入浴介助を受けた経験がなかったので、メインストリーム協会の呼吸器ユーザーの自宅に行き、入浴介助の様子を見学させてもらった。



2月9日

翌日は振り返り会議があるので、この日が避難生活の実質的な最終日となった。この日は筋ジスの当事者を介助するのが初めてという夢宙センターのヘルパー2人が翌日までの25時間介助に入った。日中はメインストリーム協会の筋ジス当事者で、かつ呼吸器ユーザーの高橋さんの自宅を訪問して、生活の様子を見学させてもらった。



夕方、夢宙のヘルパー2人とメインストリーム協会コーディネーターの青木さんの3人態勢で初めての入浴介助に挑戦した。実際に被災した場合、訪問入浴が使えないことは容易に考えられるので、貴重な経験となったのではないかと。



最終日の夜はメインストリーム協会の呼吸器ユーザーと最後の晚餐会。



2月10日

実地テスト最終日は、今回の実地テストに協力してくれた各団体から当事者スタッフやコーディネーターに集まってもらい、振り返りの会議を行った。医療的ケアを行うのが初めてだったというヘルパーも多く、貴重な経験になったという感想が多く聞かれた。

また、広域避難も必要な一方で被災地の中できちんと支えられる仕組みづくりも重要という意見もあったほか、東京でも広域避難者を受け入れる拠点機能づくりに向けた実地テストをするべきという意見もあった。



